

J・A・コメンスキー
T・G・マサリクの
講演から(3)

大梶 優子



「チェコに、パラツキーほどりっぱな人物はいないでしょう。彼は、我が民族の歴史を、初めてしかも最もすばらしく書き表しました。また、コメンスキーを大変たかく評価しました。『パラツキー (František Palacký, 1798-1876) は、

者、パラツキーのかたわらで、シュトルフは、自分の著作物にコメンスキーへの理解のほどをよく表していますが、最近のものに関しては、あまり採り上げたくありません。と言いますのは、コメンスキーの思想の哲学的な面よりも、むしろ文献学的な面を多く引き出しているのを思い出しにくいからです。悲しいことですが、私達のところ、本国では、まだコメンスキーの著作物が出版

されていません。(一八九二年当時)そして、出版される場合も、往々にして全くコムンスキー的ではありません。コムンスキーの意図が配慮されていません。例えば、一八八〇年に教育出版社から再版された『言語の扉』がありますが、これは、一言で言えば、イエズス会の学校で役立つように編集されてしまっているのです。それで、最近コムンスキーについて、多くが教義的な面や政治的な面を強調しているのも不思議とは思えません。コムンスキーには、すでに生存中から考えを異にする人々がいました。彼の弟子の一人(アーノルド)は、コムンスキーの思想の中に無神論的な考えを見付けようとしたほどです。ですから、現在、私達の周りに、コムンスキーの教義的な面や政治的な面だけを好んで採り上げる人々がいたとしても、そうおかしくはありません。

私達にとって、コムンスキーの存在は、このように考えを進めてしめくくってもよければ、以前

よりもずっと意義深いものとなるはずです。私達は、コムンスキーの思想の中で、チェコ同胞教団の哲学ばかりではなく、チェコ民族の哲学、チェコの歴史を識ることができます。私達はそこに、率直で誠実なチェコ人を見いだします。それ以上は不可能と思えるほど善良なチェコ人です。しかも同時に、全人類のために働く人間です。身近な人々のためにはチェコ語で書き、より広い範囲の人々のためにはラテン語で書いています。すでにお話ししましたが、私達の歴史の中では、二つのタイプの仕事が進められました。ターボル派と同胞教団です。両者の考えと行動の方向は、急進的です。私達のターボル派は、急進的です。また、私達のチェコ同胞教団も急進的です。どちらのタイプが良いのか、判断を下すことは、私にはできません。コムンスキーが導いた方法を、私としては選びたい気持ちがありますが、ひたむきで、落ち着いた仕事ぶり。それは、科学的な根拠

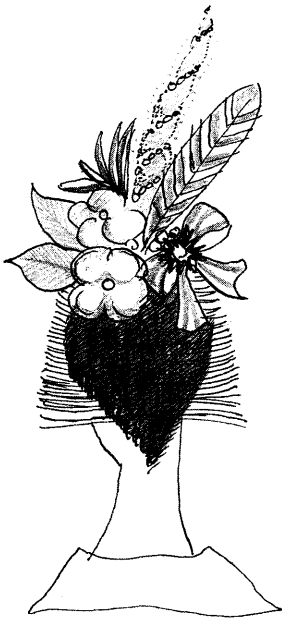
に基く確信の上に進められています。それは、私達の民族、小さな民族のためになされています。それは、大変効果的に進められています。コモンスキーから私達が理解しなければならぬのは、教育は、民族の未来を保証すること、その教育は、道徳に基くものであることです。コモンスキーは、私達に疲れを知らずにひたすら仕事をやる例を示しました。これは、私達スラヴ人が伝説の中で高く評価しているような例だと言えます。私達の民族がもちあわせている特性が、コモンスキーのところでも現れています。それは、神秘主義を事実主義の一端で結び付けているということですが、これは、チェコ民族の性質というだけではなく、スラヴ民族全体に共通する性質のように私には思えます。コモンスキーを特徴づけているのは、単刀直入に言えば、一方では、理想へ向かう向上心、しいてひたむきな努力とっておきましよう、他方では、現実的な実践力の二つです。

彼の教授学と教育学全体は、人間を例外なく実践的にする仕事を意味しています。つまり、与えられた条件を大きな目標へ向けて活かすように、上手に導いていく仕事です。コモンスキーの思想の中に、チェコ人の精神、スラヴ人の精神がみだされます。民族が何か特別の性質をもつ限り、それが、その民族の未来によいものとして働くように考えます。コモンスキーに依れば、私達に与えられた課題は、自分の民族がもちあわせているもの、それに関心を向けていくことです。それはまた、民族の学校で教え導く教師の課題でもありません。もしコモンスキーが、私達にとって親しみのある教師となるならば、私達は安心し落ち着いて、多くのことをやり遂げるでしょう。ソクラテスがすでに知っていたように、生徒、ここでは民族全体を意味するのですが、その生徒を愛する者だけが教師の役割を担うのです。

それでは、コモンスキーが自分の民族へ向けて

書いた『瀕死の母、同胞教団の遺言』からの言葉で、私の講演を終えることにします。『何よりも先ず』と言っています。『お前、チェコとモラヴィアの民族に向ける。かけがえのない宝であるお前に。ローマ帝国の裕福な人々は、自分の遺産を公共のものとして残した。神は、その例を实践することを思い付かれた。お前は、神からの祝福をうけ、水あるところに育つ草木のようであれ。苦悩に満ち、苦痛が心身を射ぬき、周囲から無視され嫌悪されようと、自分の腕で肩を支え、弓

を張って留まれ。生きよ、神の恵みを受けた民族よ。死んではならない。お前の民は、数えきれぬほどであれ。私も、神を信ずる。怒りの嵐が過ぎ去り、神のおきてが我々の頭上にかざされる時、政府は、お前達の手を再び戻すであろう。自分達のことは、自分達で決定できるようになるのだ。神は、お前達のためにヨゼフとイザヤとティモテオをもみ出し、慈悲の時がくれば、自らお前達の支柱となり、先導者となるであろう。アーメン、アーメン。』



講演の結びに引用されている『瀕死の母、同胞教団の遺言』が書かれたのは、三十年戦争が終わって、ウエストファリア条約が締結されたころである。

一六一八年、カトリック派と新教徒派の間の緊張状態で起こった「ブラハの窓外放り出し事件」を発端にして、三十年戦争が始まった。一六二〇年の白山（現在は、ブラハ市内）の戦いで、新教徒派が敗れ、新しく公布された法令で、コメンスキーをはじめとする信徒達は、国外亡命をよぎなくされた。一六二九年には、スウェーデンが参戦、カトリック派のハプスブルグ陣営に対抗できる大きな勢力となった。スウェーデン軍は、ブラハも含めてチェコスロヴァキアの各地で戦い、あちこちにその記録が残っている。コメンスキーは、チェコ同胞教団の亡命者達の保護と祖国独立の悲願をスウェーデンに期待した。スウェーデンから依頼された新教科書作成の仕事をひきうけ、代

わりにこれらの二つの援助を願い出た。一六四八年、スウェーデン側の勝利で戦争は終結した。しかし、戦後処理の条約で、チェコ問題は無視される。スウェーデンからの回答も得られない。

このような状態で、『遺言』が書き残された。チェコ民族へ向けて、母国語であるチェコ語で書かれ、民族の独立を未来に託して、それを実現させるための課題を明確に示した。

一九世紀のチェコの民族復興運動は、まさに「遺言」を受けとめるのが可能な状況で展開してきた。文学、演劇、美術、音楽の各分野に及ぶ文化活動、スポーツ、学問、教育、生活のすべての領域で、民族の独自性が強調され、自らの文化遺産の価値を再認識することが活発に行われた。民族博物館が建てられ、民族劇場が建てられた。人々の一人一人の献金によって実現したのである。運動が、人々の日常生活の次元で進められていたといえる。それでコメンスキーも、教育学

者、教育の師としてのみならず、民族の師、民族の指導者として、チェコの人々の間に定着したのだ。

この講演記事の後にある注によれば、一六五〇年の初版には、最後の文はなかったという。一七五七年にベルリンで出版され、一八四八年にプラハでそれが再版された時には、すでに加えられていたようだ。初版草稿のままチェコ語で出版されたのは、一九〇八年になってからで、当時のマサリックはそのことを知らなかったわけである。

T・G・マサリックは、一八九二年三月二八日のコメンスキー生誕記念日に、この講演をしている。一五九二年の生誕から数えて、ちょうど三百年目にあたる。

J・A・コメンスキー生誕三百年記念は、コメンスキーの存在に改めて気付き、チェコ民族の歴史の中で果たした役割を確認する機会になった。

今年、一九九二年は、コメンスキー生誕四百年

記念の年になる。二年前から始まった社会改革の中に、コメンスキーはどのような位置を占めるだろうか？ 世界に開かれた国づくりの運動の中で、「チェコ民族」にこだわらず、「世界」の、すべての人々のコメンスキーになる機会が訪れるかもしれない。楽しみである。

(プラハ在住)